

婦人の手芸活動における場と活動主体の関わり

——「神戸・下町おかんアート展」を通して——

○流通科学大学 山下 香
兵庫県立大学 安枝 英俊

1 目的

婦人が日常生活の合間に製作する手芸作品は、若い人々から「おかんアート」と呼ばれ関心を持たれている（2005:日経MJ、2010:下町レトロに首っ丈の会）。それにより、一部の婦人は自身の作品を「おかんアート」と位置づけ始めている。2009年より年1回開催される「神戸・下町おかんアート展」（以下、「おかんアート展」）は2017年で第9回目を数え、最初の2年間は婦人による作品展示のみであったが、2011年より作品販売と作品展示する婦人の一部が手芸教室を始めた。2014年から若い作家の展示が加わり、2015年から若い作家の一部が手芸教室を始めた。2011年に手芸教室が始まって以来、主催者だけでなく参加者が企画、提案、準備に主体的に関わり始めるようになった。本報告では、「おかんアート展」の参加者を活動主体と捉えた上で、企画、提案、準備に主体的に関わる参加者の特徴を明らかにすることを目的とする。

2 方法

本報告では、2009年から2017年に開催された9回の「おかんアート展」において、手芸教室を担当した参加者を対象に「おかんアート」というテーマへの関心、及び、「おかんアート展」の利用実態についてインタビュー調査を行った。特に、参加者による「おかんアート展」の利用実態については、ブルデューの資本論と界概念を援用した上で、場と活動主体との関係に着目して分析する。

3 結果

手芸教室を担当した参加者は、「おかんアート」というテーマに関心を持つ参加者と関心を持たない参加者に二分され、「おかんアート」というテーマに関心を持つ参加者は、企画、提案、準備に主体的に関わる傾向にあることがわかった。「おかんアート」というテーマに関心を持たない参加者は「おかんアート展」を経済活動（作品の販売・顧客の開拓）の場や文化活動（自身の作品展示・技能指導）の場として利用する一方、「おかんアート」というテーマに関心を持つ参加者は、社会関係を形成する活動（作品や技能の交換・活動範囲の拡大）として利用する傾向がみられた。

4 結論

「おかんアート」というテーマに関心を持つ参加者は、「おかんアート展」を「場」として捉え、その質を高める企画、提案、準備に主体的に関わる傾向にある。こうした参加者は、訪問者への声かけ、展示方法の改良や提案、設えの充実といった場をよりよくしようという界を形成する。その結果、「おかんアート展」が彼女らにとって社会関係を形成する活動（作品や技能の交換・活動範囲の拡大）の場になると考えられる。一方、「おかんアート」というテーマに関心を持たない参加者は、「おかんアート展」を手芸作品の展覧会や手作り市のように、経済活動（作品の販売・顧客の開拓）の場や文化活動（自身の作品展示・技能指導）の場として捉えている。そのため、「おかんアート」というテーマに関心を持たない参加者は、他の参加者と界を形成するに至らず、彼女らにとって社会関係を形成する活動（作品や技能の交換・活動範囲の拡大）の場にはならないと考えられる。

参考文献

日本経済新聞社、2005、『日経MJ キーワード：おかんアート』

下町レトロに首っ丈の会、2010、『おかんアート 兵庫長田おかんアート案内』

Bourdieu, P. (1986). The forms of capital. In: Richardson JE (ed.) Handbook of Theory of Research for the Sociology of Education. New York: Greenwood Press.